

序

日本の歯科の未来を明るくしたい

筆者の医科歯科連携の原点は父である歯科医師 押村進です。父は元々金属アレルギー、掌蹠膿疱症という疾患に対し皮膚科と連携して歯科の立場から治療に協力するという医療を行っていました。皮膚科の学会などで20年以上前から発表をしていた父は、医科の先生方に歯科の知識を伝えることが何より大切であると常々語っていました。そして、筆者も父と共に金属アレルギーという分野で数年間共に働き、連携医療を行ってきました。

連携を進めていく中で、あることに気づきました。

それは皮膚科の先生に歯科の金属除去の動画をお見せした時のことです。

「歯科の金属除去ってこんなに大変なのですね。もっと簡単に外せると思っていたので、安易に歯科医院に紹介してしまっていました」

また、金属除去後の患者さんの経過をお見せすると、

「歯科治療でこんなにも良くなるのですね。歯科のことを学んでいないので、全然わからなかった」

と言われました。

この時、筆者はここだ！と感じました。医科歯科連携を推し進める前段階として、まずは歯科と医科の知識の共有から始めるべきと考えたのです。

時折、歯科の先生方から、「なぜ先生の周囲の医科の先生達は、それほどまでに歯科に熱心なのですか？」と聞かれることがあります。「それに引き換え、自分の周りの先生方は関心が薄いのですよ」とよく言われます。答えは決して難しくありません。医科の先生方は、関心がないのではなく、歯科のことを知らないだけなのです。歯科のことを知ってもらい、関心を持ってもらうことで医科の先生方の反応はみるみる変わっていきます。

筆者は、患者さんの医科への診療情報提供書は歯科からのラブレターだと思っています。熱意を伝えつつ、いかに歯科に関心を持ってもらえる診療情報提供書にするか。ここが非常に大切です。

医科歯科連携の必要性が叫ばれるようになってから20年以上が経ちました。現実はなかなか思うように進んでいないように見えます。それは、皆が大切なことを置き忘れているからだと思えます。必要なのは制度でも、システムでもありません。

今、本当に必要なのは熱意ならびに歯科のことを知ってもらう努力です。

現状では医科歯科連携は患者さんの利益にはなっても、医院の直接的な収入につながるわけではありません。診療情報提供書や手紙を書いたり、面倒なことがかえって増えてしまいます。しかし、かの宮崎駿監督もおっしゃっていますが、世の中の大切なことほど、面倒なことが多いのです。

ですから、この壁を越えられるかが非常に大切です。

そして、この想いが日本の歯科の未来を変えます。

面倒なことに熱意を持ち、目の前の患者さんに健康に生きてほしいと願うこと。そして、そのために歯科に何ができるのか？この発想を持つことこそが医科歯科連携を進める上での原動力になるのです。

2021年9月吉日

押村憲昭

5

医科歯科連携を難しく考えない！ 「ご近所医科歯科連携」と捉えよう

地域のクリニック同士でつながろう

筆者が作りたい地域医療の形があります。それは、地域の医療機関が連携して重症化予防をする地域医療です。医療は現状では内科では内科疾患、眼科では眼科疾患、整形外科では整形外科疾患、歯科では歯科疾患のみというように専門分化し、各科の対象臓器を診るだけにとどまっています。以前はそれで問題はありませんでした。恐れずに言えば、人の寿命が短かったからです。

けれども、今は医療の発展とともに人の寿命はますます長くなってきています。結果として足は丈夫でも歯が悪い、内臓は丈夫でも足が悪い、歯は丈夫でも足が悪いなど、体のすべてに問題のない高齢者は少ないと思われます。けれども今後、健康寿命を伸ばすためには、「口腔」を含め全身が健康でなければなりません。

そこに必要となるのがこれまで述べてきた歯科医院独自の取り組み、並びに連携医療であると筆者は思います(☞ Special Lecture2へ)。地域の医療機関がつながり、地域で1人の患者を診ていくという医療を作っていきたい。歯科、内科、耳鼻咽喉科、小児科…医院経営はそれぞれ別でも、みんなで一緒に1人の患者を診ている、いわばクリニック同士がつながる地域の総合病院です。

歯科医院に定期検診に訪れる患者さんになんらかの疾患を早期発見できた時に他の医療機関と連携すれば、軽症のうちに治療することができるかもしれません。

歯周病は糖尿病の第六の合併症と言われ、血糖値が高いと歯周病がどんどん悪化していく可能性があります。もしも内科で口腔内をチェックしていただけたら…、そこで歯科の受診を促してもらえたら…、患者さんは歯が悪くなる前に歯科を訪れ、いつまでも自身の歯で美味しく食事ができることでしょう。そして、咀嚼ができ栄養のバランスが整うことで、未永く健康でいられる可能性が増していくはずです。

もしくは整形外科で歯科受診を促していただき、歯周病のケアを歯科医院で行うことができれば、骨粗鬆症薬を服用している患者さん達の顎骨壊死のリスクを少しでも軽減することができるかもしれません。

それぞれの医療機関の専門分野はしっかりと行いつつ、例えば内科の問診で軽く「歯医者さんに行かれていますか？足の調子はいかがですか？整形外科にも行かれるといいですよ～」また、歯科でも「血圧がお高いですね～、内科はいつも行かれていますか？足の筋肉が少し落ちてますね～」などという言葉が飛び交い始めれば、日本の医療が変わっていくように思えてなりません。内科に歯周病検査を求めるわけではなく、医師が喉を見る時に歯も見てもらい、歯肉が腫れている時などに歯科への受診を促してもらえるだけで良いのです。まだ何ができるかは模索中ですが、これは新たな歯科医療への挑戦と考えています。

▷人生100年の時代、健康寿命を延ばすには、できるだけ体のすべてに問題がないようにしていくことが必要

▷歯科、内科、耳鼻科、小児科、医院経営はそれぞれ別でもクリニック同士でつながる地域の総合病院になる

▷歯科医院に定期検診にくる患者さんの疾患を早期発見し、他のクリニックと連携しよう

7

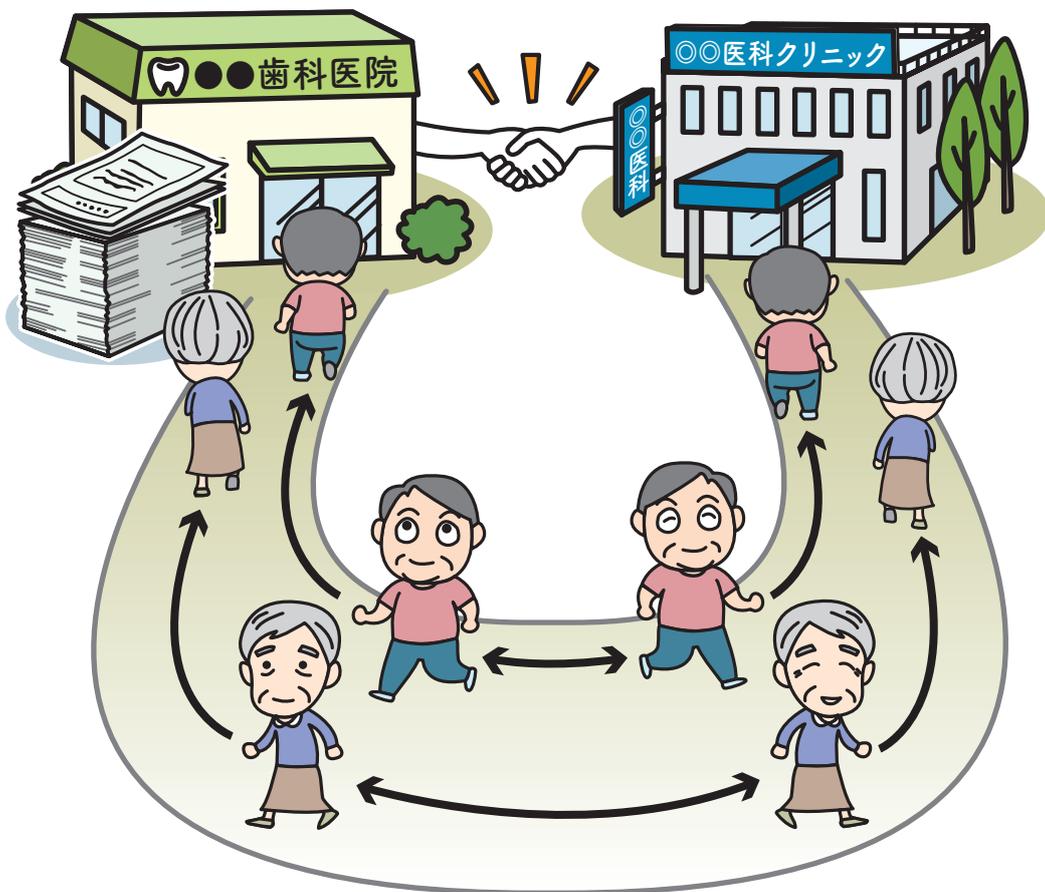
開業から1年1ヶ月で医科からの紹介患者さんは月70名!

地域からも信頼され、評価される歯科医院になれる

実は本書は開業から1年1ヶ月目で執筆しています。現在、新規の患者さんは月に200名を超えており(医科からの新患が月70名)、開業4ヶ月目にしてカルテ枚数は1,000枚超になりました。おそらく、新規開業としてはかなりのスピードです。しかも患者さんの半数以上は口コミです。

患者さんからは「歯医者でこんなことまで測って

くれるんだね～、こんな歯医者さん初めてきた～」と好評です。筆者の目指す歯科医療は、経営的側面からも明らかに順調です。結果としてプラスに働いています。ですので、前頁で述べた医科歯科連携のための設備投資は、最終的に医院の収支がプラスになるのであれば、自院の特色作りのためにも価値あるものと考えています。



2

「ここなら大丈夫そう」 なクリニックを見つける

筆者流地域での連携先クリニックの探し方とこつ

手順1 地域の医科クリニックを検索する

まずは地域のクリニックをインターネットで検索してみましょ。筆者の歯科医院は名古屋市中村区にあ

ります。そこで、「名古屋市 中村区 内科」というように検索エンジンを用いて医院を検索します。



1

妊産婦検診で来院した 妊婦さんを介してつながる

歯科検診結果を産婦人科に送り、 口腔ケアへの関心を促す

本章では、筆者が行っている「自主的に！医科歯科連携」の取り組みをご紹介します。

これらは、筆者が行っている医科歯科連携の幅を広げる肝となる部分でもあります。

例えば、筆者の開業地である名古屋市には「妊産婦検診」という制度があり、妊産婦さんが出産前後に歯科医院に検診のために来院してきます。

そこでの検診結果を読者の皆様は活用されていますか？以前の筆者は、検診後患者さんに口の状態を説明して終了でした。ですが、現在は違います。その患者さんの検診結果を口腔内写真、診断書を添えて産婦人科の先生にお送りしています。

これは筆者が自主的に行っていることです。産婦人科の医師は、妊娠という一定期間の主治医であり、妊婦さんの口腔内についても把握していただければと考えるからです。

そこで図1のような手紙を必ず送るようにしています。主治医である産科の先生がこれらの情報を知っていれば、患者さんが安全に妊娠期を送るお手伝いになることは間違いありません。また、一方的な手紙でも妊産婦歯科検診の必要性を伝えられる最大のチャンスと筆者は捉えています。

手紙を書く際、筆者は、「また、投薬、全身状態の把握など何かありましたら、先生のお力をお借りすることもあるかもしれません」と丁寧な言葉を使うよう、心がけています。私達の仕事では血液検査などを行うわけではないため、全身状態の把握が困難なことが多くあります。医科の先生の力を借りなければならぬのが現実です。私達は医科に何かをお願いする立場だからこそ、丁寧に丁寧に言葉遣いを選ぶ必要があると考えています。

また、「すべての妊婦さんが安心できるように先生方と手を取り合えたらとても嬉しいです」というように最後は熱い想いを添えています。これこそが、筆者が非常に大切にしているポイントです。妊婦さんの口腔内が綺麗で困る人はいません。そして、妊産婦さんの口腔内が妊娠により乱れやすいのも事実です。妊娠期間中の健康を守るために医療従事者が手を取り合えれば、これほど良いことはないでしょう。

産婦人科の看護師さんによると、現状では妊婦さんの口腔内の健康についてはあまり触れられていないそうです。だからこそ、そこに気づいてもらおうというのがこの手紙を産婦人科に送る目的なのです。

産婦人科への手紙の一例



〇〇産婦人科 〇〇先生御机下

いつもお世話になっております。

〇〇様ですが名古屋市の妊産婦検診で当院に受診され、口腔内の状態を拝見させていただきました。中程度の歯周病に罹患しておられ、むし歯も数カ所認められます。つわりであまり歯磨きができておられないそうです。

歯科治療は安定期に行う予定をしております。また、歯周病と早産との関係も言われており、妊婦さんはホルモンのバランスにより歯肉に炎症が起きやすいので、こちらにてしっかりと治療と口腔ケアを行ってまいります。また、投薬、全身状態の把握など何かありましたら先生のお力をお借りすることもあるかもしれません。その際はよろしく願いいたします。

またできましたら先生方にも、妊産婦歯科検診を他の妊婦さんにも勧めていただくと非常に助かります。妊娠後期になり親知らずがひどく腫れて来院する妊婦さんにも数多く遭遇します。口腔内の疾患は生活習慣などで事前にコントロール可能なことが多いです。すべての妊婦さんが安心できるように先生方と手を取り合えたらとても嬉しいです。

本状をお読みいただきまして、誠にありがとうございました。返信は不要です。今後ともよろしく願いいたします。

このキーワード
が大事
医科の先生の心に訴える

図1

3

患者さんに「健康」を意識してもらうための仕掛けをする

いつでも・どこでも・手軽にできる方法で実践！

以下に臨床の様々なタイミングで、また患者さんに応じて、患者さんに全体的健康を意識してもらうために私達が行なっている取り組みをご紹介します

す。どれも機器さえ揃えれば、簡単にできることばかりですので、ぜひ参考にしてみてください(図2)。

例えば臨床のこんな場面で仕掛けよう！

全体的な健康状態を把握しておく

初診時



問診にて内科的疾患
や服用している薬を
確認する

患者さんに自分の血圧を意識付け

**初診や月初めの
保険証提示時**



待合室で血圧測定を
行う

体質改善や生活にも着眼

口腔内チェック時



口腔内と共に体組成
計にて全身状態を
チェック

自分の糖尿病を歯科医院でも
意識づけ

糖尿病患者さん



血糖値、グルコース、
およびHbA1cを測
定する

オーラルフレイルの徴候がないかを
チェック

**65歳以上の
患者さん**



口腔機能精密検査を
実施する

図2

全身的な健康状態を把握しておく

初診時 ▶ 問診にて内科的疾患や服用している薬を確認する

❶ 患者さんに内診票に記入してもらう

患者さんには初診患者さん向けの間診表に記入をしていただきます。

❷ 歯科衛生士による確認

その後、歯科衛生士による問診票の確認を行い、直接患者さんと会話をしながら細かく質問していきます。

❸ お薬手帳で薬の確認

お薬手帳の提示をお願いしコピーをした後、各薬剤について調べます。一見手間に感じて、これが患者さんの体を知るための最初のキーポイントになります。高齢になればなるほど、患者さん自身も

ここで患者さんの体を知ることが可能になる!

覚えていない病気をお持ちの方もいらっしゃるからです。



患者さんに自分の血圧を意識付け

初診や月初めの保険証提示時 ▶ 待合室で血圧測定を行う

❶ 待合室で血圧確認

当院では、初診時や月初めの保険証を提示していただくタイミングで、待合室常設の血圧計にて血圧測定をお願いしています。

❷ 血圧測定で患者さんに自分の血圧を意識していただく

デンタルチェアに座った時の患者さんの血圧は、大抵いつもより高くなります。そこで、なるべく通常に近い血圧を知るために、待合室での測定にしています。

これを習慣化することで、患者さん自身の意識付けにもつながります。単に血圧が高いか低いかだけを見るためだけではなく、患者さん自身に自分の血圧を知ってもらうことができます。これも自分の健康への取り組みの一つです。体重が良い例ですが、人は毎日体重を測ることで、体重に日々気をつけるようになります。ですが、血圧計を自宅に持っている方はどれくらいいるでしょうか？ そのような方はごく少数で、時たま病院、人間ドックで計測する

あえて待合室で行うのがコツ!

のみかと思います。しかし、歯科医院に通うたびに血圧を計測していけば、患者さん自身が血圧も気をつけるようになるのではないかと考えました。

これも、健康な人に来ていただける歯科医院という医療機関だからこそできる未病の発見です。健康意識を高めてもらうきっかけにもなるかと思います。

